

平成二十五年九月

この夏、倫敦に旅するを機に羅馬にも立寄ることとせり。この一年半がほど、森鷗外譯せるハンス・アンデルセンが小説『即興詩人』の讀書會を催してきたれば、その主舞臺たる羅馬への關心ひとかたならねばなり。旅の直前、「ローマに鷗が」と題せる新聞の記事を見つく。鷗は元來が惡食なれど海より遠き故に今まで羅馬市内にまでは飛來することなかりしが、市の豫算減り塵芥の處理不十分になりて、残りのごみ漁りに來るやうになりたりとあり。今回ヴァチカンを訪れ、サンピエトロ廣場の廻廊に腰をおろして一休みするに、廣場に集りたる多くの鳩に混じりて一羽の鷗、よちよち歩きしをるを目撃するに及びて、新聞記事の事實なるを知り自づと笑みこぼれたり。子供らの餌與ふるを期せるものごとし。

廣場の扉の外側には、東歐の者と思はるゝ老婆の、空き罐持ちて立ち、頭を下ぐることもなく物乞ふに氣附きたり。何十年も内外にて見掛けぬ姿なり。倫敦にても、東歐より集團にて飛來し、市内に散りて乞食をする者ありといふ、金を恵むは觀光客なれば職業として成りたつものなりと聞きかじりしが、まさに噂通りの男を二三、倫敦の繁華街に見掛けたり。いづれも唯靜かに立ちをるのみなれど、羅馬の鷗思ひ出られてをかしかりし。

ナショナル・ギャラリー正面の高きエントランスよりトラルファルガー廣場を漠と眺めをりしとき、眼下に一人の若き男來りて手にする鞆を擴げ始む。なにするものと見つづくるに、衣裳を着替へて石疊に腰をおろす。その脚を四角に曲げたる姿、椅子に坐るがごとくなれども尻の下に何も見えず。さても何かの仕掛あらむるかと思守る内、一人の幼子現はれ男に何物か與へたりと見受く。ややありて別の子供も男に近寄りて小錢らしきもの授く。それにて新手の乞丐なることを了解せり。

そが覺えの頭より消えぬに、羅馬のフォロ・ロマノ前の廣き歩道をゆくや、様々の工夫凝らせる同趣の男幾人にも出會はす。中にも不可思議なりと思はれたるは、東南アジアの僧と覺しき一人の男の黄なる衣をまとひて道に結跏趺坐し、右膝の上に木の棒を支へたるに、その立ちたる棒の先に板ありて、更に別の男のその板に坐せる姿なり。いづれ何かのからくりあらむとは思へど、上下の男二人微動だにせざれば、頭を振りながらもその場を立ち去りたり。

『即興詩人』の主人公アントニオの生ひ立ちしピアッツァ・バルベリーニの噴水は、板に圍はれて修復中なりしが残念なれど、今一つの小説中の名だたる情景、スペイン坂はそこよりさして遠からぬところにあたり。觀光客その階段にただ腰をおろすためのみに蟬集するところにて、この時も階段を埋めつくしたる老若男女のあひだに、黒衣の若き尼僧十人ほど集りてはしやぎをりたるが印象に残れり。小説中にはそこは乞丐の集るところとせらる。「西班牙磴スペインア（いしだん）の王」、「惡人。ヘッポ」と綽名せらるる乞丐はアントニオのをちにて、「生れつき兩の足痿え、されど穉をんなきときよりの熟練にて、兩手に革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をちがこの

道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず」と描寫せられたり。余がこのスペイン階段の下よりまさに去らんとせる時、目の前を通り過ぐる男あり。小さき車つけたる板に乗り、布捲き附けたる兩手にてそれを漕ぎながら去り行く様は、まさにペッポの姿を彷彿させたり。餘りの偶然に立會ひたるに驚かさる。されど思ひ直すことあり。今の時代、脚の不自由には車椅子ありて、あの男のごとき舊態然たる小道具は要なからむ。傳統的なる乞丐姿にて憐愍の情を期待せるものか。倫敦羅馬を通じてもの語らぬ物乞ひ達なれど、己の發想によりて人を騙らむとすと見受けたり。